

インドネシアの森林破壊を知る

高橋 宗生

過去一〇数年間のインドネシア現地発行主要二ユース週刊誌に掲載された環境問題関連記事を拾ってみたところ、最も記事数が多かったのは森林破壊に関連する記事であった。たとえば、泥炭湿地林を農地に転換する過程で生じる森林火災、河川の上流地域の別荘開発がもたらす保水林の減少と下流地域の洪水問題、森林違法伐採による丸太の密輸と自然環境の劣化などを扱った記事である。一方、現地社会においては、巨大大資本による森林伐採が慣習法との対立を生み、土地や雇用をめぐる問題へと発展することが多く、その紛争に触れた記事も少なくない。森林資源をめぐる政治家、官僚、治安当局、企業家、地域住民間の利権構造は複雑を極め、法律の未整備も加わって有効な解決策を見出すことは容易ではない。世界一ともいわれる同国の森林減少率の背景には、多岐にわたる問題が見え隠れしている。ここでは、同国の森林破壊に焦点を当てた八本の書籍を、出版年の古いものから紹介する。

井上真編・財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）監修「アジアにおける森林の消失と保全」（中央法規 二〇〇三年）は、森林消失の

構造をグローバルな議論とローカルな現場の実態から説明することを目的としている。第三部「森林政策の重点課題」では、全六章の内三章がインドネシアの事例に割かれており、他の章で扱う東南アジア諸国の事例との比較も可能である。

井上真著「コモンスの思想を求めて カリマンタンの森で考える」(岩波書店 二〇〇四年)は全四章からなり、まず第一章で熱帯林の消失の背景、植林推進が抱える問題、地域住民の森林利用・管理への参加の実態を解説する。残りの三章においては、熱帯林保全を考える際に有効なコモンスの概念、実態、有効性を概説し、変化の最中にあるカリマンタン先住民の動きを踏まえたうえで、新たな「コモンスの思想」の輪郭を描いている。

岡本幸江編集「インドネシアの森は誰のもの? 違法伐採はなぜ起きるのか」(日本インドネシアNGOネットワーク(JANNI) 二〇〇四年)は、違法伐採が起ころるメカニズムを同国の国内問題に位置づけて考察している。コンパクトにまとめた小冊子で、写真や図表を駆使して違法伐採と森林管理のあり方に関して問題提起を行っている。

環境問題、とくに森林問題に関心を持つフォトジャーナリストが著した内田道雄著「消える森の謎を追うインドネシアの消えゆく森を訪ねて」(創栄出版 二〇〇五年)は、「森林火災」、「油ヤシプランテーション」、「違法伐採」、「紙のために消える森」の四部から構成される。統計や写真を盛り込みながら、カリマンタン島やスマトラ島の森林消失の実態を生き生きと描写している。

植物栄養学、環境気候学、生物地理学など多様な専門分野を持つ五人の研究者が共同執筆した大崎満・岩熊敏夫編「ボルネオ 燃える大地から水の森へ」(岩波書店 二〇〇八年)は、中部カリマンタン州の熱帯泥炭地域で表層と下層の二種類の火災が発生する仕組みを詳しく解説する。最終章では、巨大な二酸化炭素排出源と化した同州の泥炭湿地林において、生態系の再生を可能にする戦略を提言している。

熱帯林保護地域である国立公園を対象にしたフィールドワークの成果としては、原田一宏著「熱帯林の紛争管理 保護と利用の対立を超えて」(原人舎 二〇一一年)がある。森林破壊のアンチテーゼといえる保護地域は、自然と人間との良好な関係を築くことができたのだろうか。著者は紛争管理論を研究枠組みに使用し、ジャワの国立公園の資源をめぐる地域住民・政府間の対立の構図

を明らかにする。

増田和也著「インドネシア 森の暮らして開発 土地をめぐる(つながらり)と(せめぎあい)の社会史」(明石書店 二〇一二年)は、国家による空間再編と在地の領有性のせめぎあいを分析した研究成果である。国家成立以前から代々伝わる森林を利用する農民たちを脇目に見ながら、一方的に森林を伐採し、アブラヤシ農園の開発を進める政府と企業体。その二者に対し、土地を失った地域の農民たちは、どのように在地の論理を組み替えて自らの生活を成り立たせてきたのか。社会環境の変化に立ち向かう農民の姿が活写された一冊である。

最後に紹介する川井秀一・水野広祐・藤田素子編「熱帯バイオマス社会の再生 インドネシアの泥炭湿地から」(京都大学学術出版会 二〇一二年)は、全三編一六章からなる論文集で、さまざまな専門分野を持つ研究者一四名が執筆している。過去二五年間で五七%も減少したスマトラ・リアウ州の泥炭湿地林の歴史、生態、修復に焦点を当て、一貫した独自の視点に立って熱帯バイオマス社会の再生の可能性を展望している。

(たかはし むねお/アジア経済研究所 図書館)